

## The 12th IAGG Master Class on Ageing in Asia に参加して感じたこと

井原 拾得

(日老医誌 2024 ; 61 : 497)

私は大阪大学大学院医学研究科 老年・総合内科学に所属しており、またプライマリケア連合学会の家庭医療専門プログラムを修了した家庭医でもあります。このような背景を持つ私にとって今回参加させていただいた The 12th IAGG Master Class on Ageing in Asia はとても刺激的で楽しい三日間でした。世界中から集まった老年内科のスペシャリストによる講義を初めとして老年内科的なプロブレムを有する患者に対する症例検討を各国の参加者で議論しあったり、それぞれが行っている研究成果を発表しあったりと国内の学会以上に濃密な時間を過ごすことができました。参加前は言語の壁に対する不安を感じていましたが、同じ老年医学という共通言語があったためか、もしくは東京開催ということで言葉の壁はそれほど大きくは感じませんでした。その中で最も強く感じたのは老年内科という学問は患者の身体的なプロブレムのみならず心理社会的な背景にまで踏み込んで患者を捉えますが、各国の社会状況でそういった背景へのアプローチが異なる点でした。特に日本では介護保険制度が手厚く認知症、フレイルなどに対して金銭的な負担なく素晴らしいサービスを受けられる点が他国とは異なると感じました。また海外のみならず国内の東京大学や東京医科歯科大学、名古屋大学など普段は物理的な距離でそこまで頻繁な交流は取れないような国内の他大学の老年内科の先生方とも交流することができ、普段の悩み相談や老年内科を国内でもっと盛り上げるべく色々な話をすることができました。セミナー以外でも夕食などで他国の先生方とお酒を飲みながら話をすることがあり



拙い英語でもあたたかく受け入れてくださったこともありがたかったです。特に日本の医師は上下関係に厳しくとても polite (礼儀正しい) と言われたことが印象に残っています。(笑)

今回のセミナーでの経験を自分の臨床にも研究にも生かし、世界の老年医学のますますの発展に寄与していけるよう今後とも精進してまいりたいと思います。この度はこのような貴重な機会を与您いただき本当にありがとうございました。この場を借りて感謝申し上げます。